

【第六九回研究例会〈怪異の聞き方・書き取り方―（口承）研究の視点から〉

解説・怪異は「ことば」で象られ、
はじめて怪異になるのである

飯倉 義之

怪異を聴き、書くということ

摩訶不思議な出来事を我が身で経験したという人がその顛末を披露すると聞いて、心を動かさない人は少数だろう。人類はおそらくはその文化の始めから、その当時の常識に照らし合わせて理解しうる範疇を超えた出来事の報告に興味を示してきたはずだ。しかし、こうした怪異の体験のリアリティを人は、そのまま他者に手渡すことはできない。そのためには不思議や恐怖を言語化して筋道を立て、理解可能な形でパフォーマンスしなくてはならない。つまり〈怪異〉の「体験」は、すべて個人の「ハナシ」を通して「伝達」されるのである。怪異はあるがままに記録されるのではなく、聴き手という第三者の理解に添って再編成され、話され、書き留められるのだ。そうしてそれは、商業メディアにおいても無尽蔵に拡散し消費されている「怪談」として、現在私たちの眼前に存在している。

口承文芸研究は〈怪異〉という主題を、口承文芸の領域の民

間話話の一分類である「世間話」——話し手と聴き手に身近な時間・場所で起きたとされる奇事異聞——として聴き、考えてきた。二〇一五年二月五日に國學院大学で行われた日本口承文芸学会第69回研究例会「〈怪異〉の聞き方・書き取り方―（口承）研究の視点から―」は、そうした〈怪異〉が誰によってどう聴きとられ書かれたかという観点を重視して、「個人的な不思議な体験」がいかにして「ハナシ」として聴き取られ、書き留められるかを考えるためのシンポジウムとして企画した。怪談は、誰かの聴き／書くいとなみを経てはじめて立ち現れる話話だということを、口承文芸の視点から再照射することが、この例会の狙いだった。

怪異を聴き、書くいう実践

まず今井秀和氏「江戸期の転生騒動にみる〈怪異〉の聞き方・書き取り方の諸相」では、近世期の怪異を聴く／書くいとなみについての発表がなされた。江戸後期に武蔵国日野の少年・勝五郎が前世の記憶を語り始めた事例についての考察がなされた。今井氏はこの転生譚は江戸の知識人たちの関心を集めたため、比較的多くの記録が遺されることになった。しかしその記録は一樣ではなく、直接の聞き取りを試みる者、面会を拒む者など、聴き手の態度は一定ではなく、また勝五郎自身も、自然に語る場合と、語りを拒む場合があったと、資料を基に指摘。こうした近世資料の怪異においては、転生を信じる立場・信じない立

場・風聞として取り縮まろうとする立場など聴き手の様々な態度が、話し手に与える／結果として記録に与える影響を看過できないと論じた。

続く「柳廣孝氏「怪談を連載する―明治後期の新聞記事を中心に―」では、明治維新以降、文明開化の名の下に「迷信」として排除されてきた「怪談」が、明治30年代後半からなぜかリバイバルされ、さまざまな新聞が怪談の連載を始めたという事象を焦点化した。新聞という新しいメディアは、近代科学に拠った新しい言説の場であることを担保しながらも、前近代に属する「怪異」を〈否定していく科学的なまなざし〉に拠って紹介することです。そうした話題を乗せ続けたと指摘。近代科学知識による否定、同時期に西欧から輸入された心霊主義スピリチュアリズムによる否定、という両論を並記しながら、昔からそのような話があることに落とし込み、読者の興味を誘導してきたと指摘した。

大島廣志氏の「学校の怪談と都市伝説」では、近代から現代へまでの「学校の怪談」の系譜を整理し、戦前の師範学校や昭和期の学校文化で醸成された学校の怪談が、研究者による高校・大学での「アンケートによる資料収集」によって研究の土台が整えられ、一九九〇年代の児童図書が牽引した「学校の怪談ブーム」で注目され拡散されたこと、現在では怪談の記録は出版物からインターネットへと移行し、増殖しつつあるとまとめた。

怪異を聴き、書くさまざまないとなみ

三者の報告は、不思議な経験がいかにして聴き手によって説話として整形していくのか、という点で通底している。すなわち不思議な経験は個人の生の経験そのままでは「怪異」としては定着できず、その経験を解釈しうる口承のハナシとして生成し、さらに随筆／小説／聴き書き・アンケートとして客観的に記述されることによって確定する。そのような怪異の発生と定着、展開を考えることができるシンポジウムとなった。

デイスカッションには、世間話について一九六〇年代の『西郊民俗』誌上での「世間話の性格論争」をリードした大島建彦氏や、「学校の怪談」の第一人者である常光徹氏からも貴重なご意見をいただき、有意義なものとなった。

(いいくら・よしゆき／國學院大學文学部)